

在宅訪問教育に関わる教員のメンタルヘルスのための三つの提言

——重症心身障害児への授業記録から——

Three Proposals about Mental Health for Home Visiting Teachers

——Through the Lesson Record of Severely Retarded Students——

大 隅 順 子
(Junko OHSUMI)

1 はじめに

いくつかの制約がある訪問教育の実際のあり方についてはまだまだ模索の段階であり、訪問教育の教育課程や子どもとのかかわりにおける理論的な枠組みに関する明確な指針もなく、個々の教師の個人レベルでの判断に多くが委ねられている現状である(古谷・林, 1995)。特別支援教育の大きな発展の中で、訪問教育だけが遅々としか進まない理由として考えられるのは、訪問教育が国の制度として発足して以来常態化している担当者の経験の浅さに代表的に見られるように、養護学校教育すなわち障害児教育における位置づけの弱さにあり、他の一つは研究者の側における重度障害児教育研究の未発展状況である(加藤, 1977)。そのような福祉の谷間、教育の谷間に重症心身障害児の在宅訪問教育は位置している。これまで、在宅訪問教育を担当する教員の授業記録を分析した研究はなく、かつ職務上のストレスやメンタルヘル스에焦点を当てた研究もなかった。

そこで、本研究では、在宅訪問教育を担当している教員の授業記録から在宅訪問教育の現状と課題を明らかにした上で、メンタルヘルス維持・向上につなげる提言を行いたい。

2 対象と方法

A 県内の知的障害特別支援学校において、重症心身障害児の在宅訪問教育を担当する教員に、研究の主旨、

目的、協力の内容、倫理的配慮等を説明した。研究参加の承諾の得られた教員は5名で、いずれも20年以上の教員歴を持つベテラン教員であった。調査時期は2013年3月~2014年4月で、その間に過去1年分の授業記録の提出を依頼した。本研究では、KJ法(川喜田, 1967/1970)を採用し、授業記録をKJ法に準じてカテゴリー化し検討した。KJ法は、蓄積された情報から必要なものを取り出し、関連するものをつなぎあわせて整理し統合することに優れた研究方法である。在宅訪問教育のように、日常なじみの少ない教育活動の記述や、複雑さを有する記述にも適している。加えて、KJ法は、研究だけに終わるのではなく、その結果を問題解決にまで結びつけていくことができる特性を持っている。KJ法を通して、在宅訪問を担当する教員が、どのような思いで日々の教育活動を積み重ねているのか、また授業についてのストレスは何かという予測を得ることができる。訪問教育は少数事例の積み重ねであることを重視し、記載された文脈をていねいに理解していくことを大切にしたい。

3 結果

分析の結果、総ラベル数は268枚であり、「授業」「生徒の反応」「保護者の反応」「教師自身」の4つの内容に分類された。

Table 1 授業記録の分類

内容	総件数	分類	件数	記録
授業	44	授業	17	課題をしっかり見据え、楽しい教材を準備していきたい。(B先生)/最後まで、楽しいひとときが提供できるように努力したい。(C先生)/教師主導で進めていることに「これって○○○さんに意味があるのかな」という思いがちらつきます。(D先生)
		介入	17	新しい教材を使うときにはお母さんに確認すること(F先生)/そ目じらを立てるほどのことでもないと思うのだが、ご家庭の方針なので今回はスルーしました。(G先生)
		否定	10	少し前に授業で行った小箱などを「いりません」と返された。「ガラクタ作りばかり、もうやめてほしい」という意思表示に思えてならない。(E先生)/
生徒の反応	プラス	生徒の反応	27	その笑顔を見ると、またこうやって楽しい時間がたくさん過ごせたらいいなあとと思った。(C先生)/ほっぺに教材をそっとくっつけると驚いてびくっと動いた。授業の手ごたえを感じることができた。(A先生)/話しかけながら手を動かしていると、それが刺激になってか、期待通り目覚めてくれた。(B先生)/○○○さんなりにいろいろ感じたり楽しんだりしてくれているのだと思う。(B先生)
		愛おしい感情	19	ふと視線を感じて○○○さんを見ると、なんと○○○さんが一生懸命私の顔をみてくれている。○○○さんが可愛くてたまらなかつた。(B先生)/「可愛い、可愛い」と褒めると少し笑ったような気がした。(C先生)/何をどう感じたのか(偶然なのだろうけど)重心の生徒が展開する世界って素敵だと思う。(C先生)/はじめて「可愛いな」という感情が自分の中に芽生えてきて、驚きました。(D先生)/私の顔を見上げるときの表情が本当に愛らしい。(E先生)
	マイナス	無反応	7	どこまでわかっているか楽しめているか不安である。(B先生)/○○○さんの眠りはとても深く入浴してもりぼりしても起きないというのだから、授業程度の刺激では起こすことはできない。(B先生)/今日は起きている時間が3分くらいだったので魂に語りかけてきたという感じです。(D先生)
	拒否	4	「計算しない。明日する。」「パソコンしない。明日する。」「わかったよ。明日しようね。」とあっさり引き下がる。(E先生)/このごろ「～しない」ということが多いが、気に入ったことを中心にやっていると。(E先生)	
保護者の反応	プラス	笑顔・感謝	24	母が「先生が吸引しているとき、○○○が手を上げていましたよ。きつとがんばらなくていいっていいんですよ。」と言って嬉しかった。(B先生)/楽しい話ではないが、母がこのように私に相談してくれたことがうれしかった。(C先生)/お母さんが笑顔で対応してくれて嬉しかった。(E先生)/母よりメール…。「元氣な○○○を見て、先生が喜んでくれてうれしかった。」「やはり母も不安が一杯だったのだから。(E先生)/お母さんの表情は柔らかく、笑顔もみることができてよかった。(F先生)/久しぶりに、可愛い笑顔と穏やかなお母さんの表情に満たされた気持ちになった。(F先生)/私が○○○の好きな世界を理解しようとしていることに、○○○よりお母さんが嬉しそう。(G先生)
		傾聴	23	母に「いかがですか」と声をかけたら、先日と同じように「待ってました」というくらい勢いで話を始められた。(B先生)/母が私と話がたくずって後ろで待っておられた。「在宅訪問は保護者のレスパイトも仕事の範疇」という言葉を思い出した。(D先生)/時間が来ていたのだが母が急に自分の身の上話を始めたので、おつきあいた。何か伝えたいことがあるのかも知れない。(E先生)/自分がこだわっていることなども楽しそうに話された。限られた中で生活に彩りができるように工夫しておられると思った。(E先生)/お母さんと話が盛り上がった。久しぶりによくお話ししてくださったので嬉しかった。(F先生)
	マイナス	要求	8	意な変更や細々とした注文が延々と続き、ほとんど授業ができなかった。(A先生)/保護者からのリクエストに断れない雰囲気。持ち帰りとなり作り直す。アウェイで戦っている者のつらいところ。(B先生)
	感情表出	19	母の不機嫌が気になって気分が弾まない。(C先生)/お母さんテンション低し。これは私に怒っているのではなく、何か元気の出ない出来事が背景にありそう。(G先生)/お母さんには気分の上がり下がりがあり、今日は気分の下がっている日でした。そういう日はとても気がつかない。(G先生)/お母さんがずっと横で授業を見ておられ、片づけをきちんとしなかった○○○をきつく叱る。その後は委縮してしまって母親の顔色ばかりみている。(G先生)	
教師自身	82	教師のアイデンティティ	27	この対応をされると「何か気に障ることをしたり言ったりしたのだろうか。」ととても気になる。(C先生)/お母さんがずっと私をいらいらさせたので緊張しました。(D先生)/学校からの色々なものを受け取ってもらえないことにはどういった意味があるのだろうか。(E先生)/お母さんの表情は硬く、すごく緊張した。(F先生)/母の視線が気になる。気にならないと言ったらそうなる。(G先生)
		体調管理	7	訪問先では鼻をすするのも厳禁。自転車置き場で鼻がちぎれるほどかんでから入室。(E先生)/こちらの体調にも気を使う。風をひいてもいけないし、インフルエンザの時期は学級閉鎖の数や罹患数を伝え、そのクラスと接触がないことが条件で授業可能となる。(F先生)
		メンタル	12	「可愛い」というよりは、「命を預かる責任感」の方が大きく、とても授業が楽しいとは思いませんでした。(D先生)/うまく心を調節して病まないように頑張っていきます。(D先生)/病院訪問は家で授業よりとても気が楽です。環境がどれほど人の心の健康度に影響するかを実感します。(D先生)/今の課題は自分の精神のコントロールである。仕事がつまらないなどとは言わずに前向きにいい方と考えていきたい。(G先生)/
		客観的に訪問教育を見る	36	訪問教育は少しでも気を抜くと命のともじびが消えてしまう危険性のあるポジションなんだ。(D先生)/○○○(名前)は今、福祉も医療も手が出せない「谷間」にいるのだと感じた。(B先生)/重心の子の家族はケアで精一杯というのはよく聞くこと。(B先生)/とにかく何でも一人でやらねばならない。学校を背負って行く覚悟で。健康にも留意。(E先生)/本校のウェブに乗れない生活はさびしいときがある。(E先生)/毎日家庭訪問・毎日参観日という感じ。(E先生)/授業は短時間だが言動がとても気を使うので疲れる。(E先生)/学習内容を考えたり準備するのは結構大変。持ち出しも多い。(E先生)/思い通りの授業ができないことがあるが、いつも臨機応変に対応する柔軟性と忍耐力が必要。(E先生)/どんな子も私たちの出合いを持ってた子どもです。普通の小学生として、普通の中学生として声をかけてあげることが私たちの役割です。(E先生)/お母さんは学校からのプリントがあるときはなんだか嬉しそうです。プリントは学校と家をつなぐ大切なツールです。(G先生)/訪問教育は家庭の事情や親のことなどを全て含めて訪問教育なのですね。ようやく色々なことが見えてきました。(G先生)

1. 授業について

総ラベル数は44枚であり、授業そのもの関すること17枚、介入17枚、否定10枚の3つに分類された。「教師主導で進めていることに『これって〇〇〇さんという意味があるのかな』という思いがちらつきます。」という記述のように、重い障害ゆえに生徒からのダイレクトな反応がなく、それゆえ、生徒への学習効果を教員自身が実感できず、手探りの中で授業を進める悩みが生じていた。また「新しい教材を使うときにはお母さんに確認すること」の記述のように、保護者から授業内容への介入にも、真摯な姿勢で対応している様子も確認された。教員は授業において、考えうる最善の教材を準備する。しかし、それが保護者の意に沿わない場合もあり、その場合は、全てのケースで保護者の希望に沿った内容に修正していた。しかしベテランであればあるほど、子どもの伸びが予想できるため、授業の内容を安易に変更せざるを得ない状況に、もどかしさを感じていた。しかし、不本意な思いは一旦封印し、保護者に真摯に対応していた。

2. 生徒の反応について

生徒の反応への記述は、プラスの反応とマイナスの反応に分けられ、総ラベル数は57枚であった。うち、プラスの反応46枚は、生徒からの反応27枚、愛おしい感情19枚に分類された。マイナスの反応は11枚あり、無反応7枚、拒否4枚に分類された。「ほっぺに教材をそっとくっつけると驚いてびくっと動いた。授業の手ごたえを感じることができた。」「ふと視線を感じて〇〇〇さんを見ると、なんと〇〇〇さんが一生懸命私の顔を見てくれている。〇〇さんが可愛くてたまらなかった。」のような内容が見られた反面、「〇〇〇さんの眠りはとても深くて入浴してもリハビリしても起きないというのだから、授業程度の刺激では起こすことはできない。」「今日は起きていた時間が3分くらいだったので魂に語りかけてきたという感じです。」というように、重症心身障害ゆえ、反応がほとんどない生徒に、授業の手がかりがつかめず困惑している記述もみられた。

3. 保護者の反応について

総ラベル数は85枚で最も多かった。保護者からのプラスの反応としては47枚あり、保護者の笑顔や担任への感謝が24枚、保護者の話の傾聴に23枚のラベルがあった。マイナスの反応は38枚で、過度の要求8枚、保

護者の感情表出に19枚、教師側の深読みに11枚のラベルがあった。

「こういう対応をされると『何か気に障ることをしたり言ったりしたのだろうか。』ととても気になる。」といった記述が見られ、授業だけではなく、保護者の心理的な揺らぎについても、在宅訪問教育を担当する教員は常に気を配っていた。

4. 教師自身について

教師としてのアイデンティティ27枚、体調管理7枚、メンタルヘルス12枚、客観的に自分の置かれている立場を見るものが36枚あり、合計82枚が教師自身についてのラベルであった。

「〇〇くんの世界は家だけ。そう思うと自分の訪問にも意義があるのかと思われました。」という自分のアイデンティティに関する内容、「訪問教育は少しでも気を抜くと命のともしびが消えてしまう危険性のあるポジションなんだ。」「〇〇〇（名前）は今、福祉も医療も手が出せない「谷間」にいるのだと感じた。」「訪問教育は家庭の事情や親のことなどを全て含めて訪問教育なのですね。ようやく色々なことが見えてきました。」といった客観的に訪問教育そのものをとらえる記述が多かった。このことから、重症心身障害児への在宅訪問教育が、他人から評価されたり賞賛されたりする機会の少ない仕事であると推測する。また、自分自身の体調管理も重要な仕事であり、「訪問宅では鼻をすするのも厳禁。自転車置き場で鼻がちぎれるほどかんでから入室。」という記述や、学校内でのインフルエンザの流行時には、「こまめに学級閉鎖数や罹患数を報告する。」という記述も目立った。また教員自身のメンタルヘルスも大きな課題であり、「今の課題は自分の精神のコントロールである。仕事がつまらないなどとは言わずに前向きにいい方に考えていきたい。」という記述もあった。

4 まとめ

メンタルヘルスへの三つの提言

今回、在宅訪問教育担当教員の現状と課題が明らかにされたことで、担当者のメンタルヘルス維持・向上のために三つの提言をしたい。

一つ目は「在宅訪問教育は、保護者との良好な関係なくして存在しえない」ことへの再認識である。病院訪問や施設訪問とは違い、在宅訪問教育では保護者に拒否されれば、それはすなわち授業そのものの消失を意味する。今回、268枚のカードのうち、最多の85枚が保護

者関連の記述であったことから、在宅訪問教育における保護者の存在の心理的な大きさが伺えた。プラスの反応 47 枚と併せて、マイナスの反応 38 枚の意味するところは、保護者の負の感情にも敏感に反応し対応できているということである。このように保護者の感情の変化を的確に捉えることは、保護者との良好な関係につながる。この保護者との良好な関係は、在宅訪問教育を担当する教員がメンタルヘルスを良好に保つ上での欠かすことができない礎となっていた。「保護者支援は訪問教育における重要な柱」であることを今一度再確認すべきであろう。

二つ目は、「生徒からのプラスの反応を在宅訪問教育に対する強力なモチベーションとすべし」ということである。子どもからの反応がないことで、授業への自信ややる気を失わないためにも、酸素濃度、表情、まばたきなど、考え得る全ての手がかりを総動員して、子どもの変化を見ていく必要がある。今回の調査では、生徒の反応に関する 57 枚のカードのうち、46 枚がプラスの反応についての記述であった。2014 年の全国訪問教育研究会の全国調査でも、「担当者の思い・嬉しいこと」として、「児童生徒の変化」が上位であった。Dworkin (1987) は、無意味性と無力性をキーワードに、バーンアウトを疎外の極致的現象としてとらえ直している。これは最重度の子どもへの教育の意味、自分の授業への無意味性に関する授業記録と重なる。子どもからの微弱微小の反応を丁寧に読み取ることができる繊細な感受性を兼ね備え、子どもたちからの小さな反応をすばやくキャッチしそれに共感できる教員は、メンタルヘルスも良好である傾向が強かった。

三つ目は、「管理職の在宅訪問教育担当教員に対するメンタルヘルスへの関心」である。今回の調査において、保護者からの攻撃的な態度やことばで、精神的なダメージを受けているものが少なからず存在することが明らかになった。逃げ場のない生徒宅という特殊な空間においてのこころの傷つきは、一人では癒されにくい。これが度重なると継続的な教育実践を阻害する大きな要因となる。管理職が在宅訪問教育担当教員のメンタルヘルスに対して関心を持ち、こまめに声かけや励ましなどを行うことが、こころの健康に大きく貢献する。

訪問教育の今後の発展のために

2014 年の全国訪問教育研究会の全国調査の結果では、訪問教育を担当する教員の経験年数は 3 年未満が最も多かった。訪問教育の発展の為に、長く勤務したいと望

む教員の増加とそれを支える職場環境が必要である。教育実践が細切れにならないために、また、重症心身障害についての専門性を持った教員を一人でも多く育成していくためにも、これはとても重要なことである。教員が単身で家庭訪問し、重症心身障害児に対して授業をすることは、生徒の体調の急変もあり、常にストレスや不安感と隣り合わせである。また授業に保護者が同席されているご家庭では、視線を含めた種々のプレッシャーも加わる。このように教員にとって、重症心身障害児への在宅訪問教育には、ストレスが多い。Selye (1974) は、ストレスとは外部刺激(ストレスラー)に対応して生じる生体内のひずみ状態であり、非特異的に示される汎適応症候群と定義した。在宅訪問教育では、保護者からクレームがあった場合、環境的に逃げ場がないこともあり、一気にメンタルヘルスの悪化につながりやすかった。これらのことを管理職が理解した上で、孤軍奮闘する職員を心理的に支えていくことこそ、在宅訪問教育担当教員のメンタルヘルス向上の鍵となる。

在宅訪問教育を担当する教員が、心身ともに生き生きと働く姿そのものが、後に続く人材の確保につながり、結果、重症心身障害児教育そのものを大きく発展させるのであろう。

文献

- Dworkin, A. G. (1987). *Teacher burnout in the public schools: Structural causes and consequences for children*. Albany, NY: State University of New York Press.
- 古谷義博・林 信治 (1995). 訪問教育における子どものかかわりを行う際の一つの視点. *特殊教育研究*, 32(5), 45-50.
- 加藤忠雄 (1997). 訪問教育研究の到達点. *特殊教育研究*, 35(2), 51-55.
- 川喜田二郎 (1967). *発想法 - 創造性開発のために*. 東京: 中公新書
- 川喜田二郎 (1970). *続発想法 - KJ 法の展開と応用*. 東京: 中公新書
- Selye, H. (1974). *Stress without distress*. Philadelphia, PA: J. B. Lippincott.
- 全国訪問教育研究会役員会 (2014). 全国訪問教育研究会機関紙「こんにちは」別刷り 訪問教育に関する第 7 次調査の概要 (第一報), 1-4.
(2014 年 11 月 6 日受理)